# フローレンス・ナイチンゲール＊＊一人だけの戦争＊＊

「看護とは新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静けさを適切に整え、これを活かし用いること。また、食事内容を適切に選択し与える事。こういった事のすべてを、患者の生命力の消耗を最小にするよう提供する事を意味すべきである。」

（看護覚書）

世に「看護」というものを初めて体系化し、その意義を明らかにしたフローレンス・ナイチンゲールの言葉である。

これは私たちビルサービスが、今日やっている事ではないだろうか。新鮮な空気を送り、必要十分な照度、温度、そして清潔な環境は日々の清掃によって生み出される。そして、当社が患者給食に関わっている現場もある。

現代では、ナイチンゲールの言った看護の多くは私たちが担っている。つまり、衛生と栄養である。これをなくして、いかなる医療行為も二次的なものである。実際、ナイチンゲールは野戦病院の現場で、清掃し、換気し、洗濯した。

「クリミアの天使」「カンテラの貴婦人」と言われたナイチンゲールは、一八五四年のイギリス戦時大臣の要請を受け、三十八名の看護団を率いて黒海のトルコ側・スクタリの野戦病院に到着した。そこで見たものは、ネズミが走り回り、虱とダニが傷ついた兵士を文字通り蝕む、血と汚物にまみれた想像を絶する病院の環境だった。

驚くべき事に、この施設の死亡率は四十二％にものぼっていた。戦場で傷ついた兵士は、病院で感染症のため死に続けていた。当初、現地の軍医長官はナイチンゲールたちが、野戦病院に入る事さえ拒絶したのだった。

さまざまなやり取りの後、看護団は便所掃除を始める事が出来た。便所だけはどの役所の管轄でもなかったのだ。その後、徐々に兵士たちの信頼を得たナイチンゲールは、病院全体の完全清掃に立ち上がる。

まず、患者を裸にし、用意した風呂に入れる。その間にその垢だらけの衣類は洗濯し、全ての窓を開放する。壁、床にこびり付いた汚物をそぎ落とし、その後ブラシで洗剤洗浄する。それは現代における「看護」という言葉とも「清掃」という言葉とも程遠い光景であったと思う。

このクリミア戦争は近代戦として最初の世界戦争であり、銃、砲、という大量殺傷兵器が兵器の主力として登場した。ナイチンゲールの祖国であるイギリスは、オスマン（トルコ）側としてフランスとともに参戦した。

この戦争ではダイナマイトの発明者として有名なノーベルもロシアに機雷を売り膨大な利益を上げた。また、トロイの遺跡の発掘で有名なシュリーマンも武器や補給物資を扱い財をなし、後にトロイの発掘の資金としている。また、トルストイはロシア軍士官としてこの戦争に従軍し、帰国後その経験をもとにして「セバストポリ物語」を書いた。

結局クリミアに派遣されたイギリス軍は、勝利した側にも関わらず、二万五千人の派遣軍のうち一万八千人が戦病死するという結果となった。実に七十二％の死亡率である。これは、他の国も同様で、双方膨大な戦費を使い、大量の人命を失うこととなった。

ナイチンゲールは二年間この戦場で看護婦として働いた。そして、自身もクリミア熱に感染し、戦争終結後ロンドンへ帰る事となった。クリミア熱とはその後、クリミアコンゴ出血熱と言われ、ダニが媒介するウィルス性の感染症である。

そして、ナイチンゲールの一人だけの戦争はここから本格的に始まったのだった。

帰国するや「英国陸軍の健康、能率および病院管理に関する諸問題についての覚書」を著し、クリミアでの死因は劣悪な衛生環境にあったと訴えた。つづいて、「イギリス陸軍の死亡率」を著し、統計を駆使し一般イギリス人男性と陸軍軍人男性との感染症における死亡率の著しい差を実証した。

彼女のどのような権威にもひるまない批判の姿勢は、既存の権力者には面白いはずはなかった。しかし、クリミアでの活躍で一躍国民的ヒロインになったナイチンゲールに対しての、表立った反論はなかった。しかし、彼女の意見を取り入れ、軍や病院を改革しようとする動きは現われなかった。

彼女はひるまず、インドの公衆衛生政策についての提言や病院の建築方法など様々な方面での見解を発表し続けた。その著作は百五十、書簡は一万二千通に上る。ナイチンゲールは言論を武器として戦ったのだった。ロンドンの彼女の事務所兼住居は畏敬と少々の揶揄を込めてロンドン子に「リトル・ワー・オフィス」と呼ばれたそうである。

一九一〇年八月十三日、フローレンス・ナイチンゲールは九十歳の生涯と閉じた。墓石には故人の遺志により「F. N. 1820生まれ 1910没」とだけ記された。

「天使とは美しい花をまき散らす者の事ではなく、苦悩する者のために戦う者の事である」

ナイチンゲール自身の言葉である。

代表取締役社長
鈴木英介

